



木版画
安藤修二

東北関東大地震で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

～ 季節 だより ～

「奥多摩の花 100 選」が決まりました

奥多摩の花 100 選が決まりました。昨年中に奥多摩を訪れた方々からのアンケートを集計し、上位 120 種類の植物の中から、当観光協会事務局と名人・達人観光ガイドのスタッフとが協議して 100 種類の植物を選定しました。

季節別に紹介すると、春の花は、カタクリが圧倒的に多く、次いでニリンソウ、ミツバツツジなどが上位にランクされました。多くの方々がお奥多摩に咲く花をよくご存じのようでエイザンスミレやミヤマキケマン、それに当観光協会のイベントで見に行くアカヤシオやシロヤシオも人気がありました。

数量的には、アブラチャンやダンコウバイ、キブシ等、早春の花が多い結果となりました。やはり、寒い冬が明けて目にする春の花には印象深いものがあるのでしょう。

夏の花では、レンゲショウマが第 1 位で、青梅市の御岳山が有名ですが、奥多摩町内の低いところでは、海沢の神庭の里山、1,000m を超える川苔

山、三頭山で見ることができます。

滝付近の岩場や日原辺りでは水気のある石垣に群生するイワタバコをはじめ、溪流の花タマアジサイ、奥多摩湖畔でよく見かけるネムノキなど、夏の花としては、涼しげな薄紫色系の花が好まれるようです。これらの中でも特にタマアジサイは、ユニークな球形の蕾で多摩川水系の花と言っても過言ではないほど、よく見る花です。

秋に咲く花では、キク科のリュウノウギクやアワコガネギクが 100 選入りしました。リュウノウギクは、むかし道の羽黒坂付近や浅間神社下の見晴らしのよい場所で見ることができます。アワコガネギクは、むかし道の中間点・白鬚トンネル付近の国道との接点付近にあります。その他、鹿の食害で少なくなりつつあるオヤマボクチは、奥多摩で草餅の原料とされています。日原にある宿泊施設「ねねんぼう」は、オヤマボクチの地元での呼び名です。

今回は、紙面の都合で 100 種類すべてを紹介できませんが、別途、写真や絵画等を添えて公表してまいります。
(岡崎 学)

～新企画紹介～

1. セツ石山から千本ツツジ (実施日6月15日)

鴨沢バス停から雲取山登山道に入り、30分ほどで鴨沢橋から上がってくる車道に出合います。ここは小袖乗越ですが、数年前に“権現平”という標識が立てられました。

車道を少々歩き、再び登山道に入ります。緩やかな上り坂が続き、ほぼ20分間隔で最初の廃屋、3軒目で石垣のある廃屋、そして今では水の少ない水場を通過し、その後、同じく20分ほどで堂所に到着します。ここから道は徐々に厳しくなります。すぐ先の広い平坦地で十分に休息をとりましょう。

20数分でセツ石小屋への直登する道に出合います。以前には指導標がありましたが、それが、“倒木のおそれ 不可”に代わり、今はその表示もなくなっていきます。直登路を避けて登ること10分程度で、雲取山への道と分かれ、セツ石小屋を目指して右へ登ります。ここからの見返り富士の姿は美しい。同じく10分ほどで小屋へ到着します。小屋の前からは、山頂での眺望とは趣の違う景観を楽しめます。

いよいよセツ石山を目指す最後の登りです。急坂を登り稜線に出ると、道は緩やかになります。セツ石神社では将門伝説を思い浮かべ、ゆっくりと登り、小屋から30分弱で山頂に立ちます。

山頂からは、奥多摩の山々が一望できます。中でも雲取山への上り坂が延々と続いて見える右端の眺めは、印象に残るものになると思います。

下りは千本ツツジを目指します。アップダウンのある尾根筋を忠実に歩く道と、淡々と歩ける水道局管理歩道とがあります。一概には言えませんが、山歩きを楽しむには尾根筋歩き(約35分)を、景観を楽しむには管理歩道歩き(約25分)がよいでしょう。

千本ツツジからは、赤指尾根を峰集落に下ります。多くは、人工林の中のジグザグ下りですが、カラマツ林との出会いもあります。1時間30分ほどで、標高1,000mの峰集落に辿り着きます。

集落から峰谷まで車道が下がっていますが、随所にむかし道があります。標識はありませんが、曲がりくねる車道の先を見極めて、入り込んでみてください。

20数分で峰谷バス停に到着し、山行の終了です。

(高野義男)

2. 水根口から六ツ石山 (実施日9月22日)

水根バス停から「むかし道」の案内に沿って林道を進むのもよいが、ここでは大麦代トンネル脇から水根沢沿いに右岸の道を遡上したい。夏8月には落石防護

ネット沿いにイワタバコの花が数多く見られる植物観察の穴場でもある。間もなく現れる橋を渡り左岸の水根沢林道を右折すれば、旧奥平家の「青目立不動尊休み処」に出る。しばし奥多摩湖の展望を楽しみ、旧宅裏の林道終点から登山道に取り付く。

水根の産土(うぶすな)神社(うぶすなさま)に登山の安全を祈願し、ひたすら人工林の中を登ること約1時間で「風ノ神土」の小さな祠にたどり着く。小休止の後ひと登りで防火帯に出ればそこはハシノキ尾根のトオノクボ、境集落からの道を合わせる。ここからは北東側の展望を楽しみながらおよそ40分で、三等三角点のあるなだらかな六ツ石山山頂への到着である。

昼食の後は大岳・御前・三頭の奥多摩三山をはじめ南には母沢山塊から富士山を、そして西方には樫(かや)ノ木尾根から鷹ノ巣山、東方には川苔山からはるか都心のスカイツリーまでの展望を楽しみたい。

さて下りは、北東方向に標高差30m程で将門馬場方面からの石尾根縦走路に出て、狩倉山の南面を巻き三ノ木戸山方面を目指す。

石尾根縦走路の分岐から三ノ木戸山への往復は約25分であるが、初心者は必ずもとの分岐に戻ってから下山したい。狩倉山から三ノ木戸山北面にかけては広大な東京農業大学の演習林があり、下方の峰畑には同大学合宿所の赤い屋根も見える。

南西に大きく回りこんで崖に架けられた丸太橋を渡ると間もなく将門伝説の廃村絹笠集落の稲荷神社に着く。杉とイチョウに圧倒された赤い鳥居がいかにも窮屈そうである。隣には大日如来と風神の石像があり、登りで見かけた「風ノ神土」といいこの地方には、風神を祀る風習があったのかも知れない。

日原川の対岸に本仁田山のどっしりとした展望を楽しみながら道なりに10分程で城集落からの林道に飛び出す。民家の間から標識に従って羽黒三田神社の裏方に出て階段を下れば「むかし道」入口の国道に出る。しかし、ここでは陸橋を渡って左に回り込み疲れた足には優しくゆっくりと愛宕神社の突峰等を眺めながら「元葉の森」を目指したい。ここの大杉は樹高が45mもあり、奥氷川神社の杉と比べても決して引けをとらない。今ここには稲荷社が祀られているが、その昔室町時代までは羽黒権現が祀られていたともいわれている。南一丁目のバス停から日原街道の基点を経て観光案内所のある奥多摩駅前是指呼の間である。

(富士光男)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その19 ～

「鷹ノ巣山の行方不明者」

9月17日の夜は、青梅警察署山岳救助隊と奥多摩消防署山岳救助隊との懇親会が鳥ノ巣の蕎麦屋の2階で行われていた。

山や川の遭難現場などに出動し、一緒に救助活動に当たっていることから、お互いに顔を知り合って親交を深め、スムーズな協力体制を作ろうと、毎年1回交代で幹事をやり、飲みながら情報交換などもやろうというものである。

午後7時30分、だいぶ酒も回り賑やかになってきたころ、夜勤のためこの席に出席していない佐藤隊員から電話が入った。内容は「今日友人と水根登山口から鷹ノ巣山に登った40代の男性2人が、下山途中にはぐれてしまい、先行した1人が下山して登山口に停めた車の所で待っていたのだが、相棒は暗くなっても降りてこないと届け出を受けた。これから清原小隊長と、倉戸山から榎ノ木尾根、水根沢登山道を搜索してみる」との連絡であった。夜間であることから十分に注意して、絶対無理しないようにと指示をした。

私は席に戻り、懇親会に参加している高田副隊長に報告するとともに、奥多摩消防署長にも、これから2名が搜索に入る旨を連絡した。

午後8時30分、懇親会もお開きとなって、搜索に入山している佐藤隊員に電話してみる。「いま2人で榎ノ木尾根を鷹ノ巣山方向に向かっているが、まだ発見には至っていない。今日は水根山南側、水根沢登山道分岐から水根集落に搜索しながら下山する旨の連絡があった。

高田副隊長から、今日発見にならなければ、明日午前8時30分から搜索に入る旨を各隊員に指示を出し解散した。

翌18日、私も早めに出動し搜索範囲を設定した。届出人のSさんも来たので再度行方不明の状況を聞き、榎ノ木尾根から派生する迷いそうな枝尾根や沢などに、3個班に分かれて入山し搜索することにした。

私は橋本小隊長と、奥多摩湖に注ぐ室沢に入り、右俣と左俣に挟まれた尾根を倉戸山に登り上げ、熱海に下る途中から水根に延びる尾根を下った。いずれも過去に道迷い遭難のあった尾根である。下山したら、警察犬が来ているから再度倉戸山まで案内してくれという。警察犬担当者と犬2匹を案内し再度倉戸山頂まで登る。Nさんの体臭の染込んだスニーカーを嗅がせ、犬を放ったが、時間が経ちすぎたの

か、Nさんがここまで来ていないのか、犬は追うことをしないため、あきらめてそのまま下山した。他のどの班も手掛かりをつかめず下山していた。

翌19日も、3個班に分かれ1個班は水根沢を遊行して入奥沢を下山予定。他の2個班は要人警護や災害救助などで活躍する警備犬2頭の応援を得て、ヘリで鷹ノ巣山まで飛び水根沢登山道、榎ノ木尾根の枝尾根を搜索した。警備犬を投入しても何の発見もできず夕方下山した。沢の班はまだ下山していなかった。

午後4時20分、奥多摩消防署から連絡が入った。今日の午後から1人で雨降谷に搜索に入った消防の宇都宮隊員から、大滝の上でNさんを発見したと連絡が入ったという。携帯電話の電波が悪く、詳しいことは分からないがNさんは元気でケガなどはないという。雨降谷は警察の救助隊もまだ遊行しておらず、明日に予定していた沢だ。宇都宮隊員は奥多摩町に住む登山家の山野井くんが代表を務める日本登攀クラブの会員で、山にはめっぽう強い隊員だ。大滝上で救助を待っていたNさんを発見し、食料、防寒衣などを与え、連絡に下山中だという。

入奥沢を下山中の渡辺隊員と市川隊員に無線を入れると、奥集落に下山した旨の回答があった。Nさんが雨降谷の大滝の上で発見になったので、先行して現場に向かうよう指示した。

我々もビバークになることも考慮にいれ準備し、山岳救助車で雨降谷に向かった。途中、奥多摩湖畔で山から降りてきた発見者の宇都宮隊員に接触した。山岳救助車に乗ってもらい雨降谷出合いに向かいながら、発見の状況などを聞いた。雨降谷は長久保沢とも呼ばれ、沢登りをする登山者に人気の高い沢である。大滝はその中間地点に位置し、ドウドウと水を落とす20メートルほどの直瀑である。8年前、この大滝を登っていた大学生のパーティの1名が転落する死亡事故が起きて収容したことがある。

1人で登った宇都宮隊員は、大滝の左岸の尾根を大きく高巻いて落ち口に降りたところ、救助を待っていたNさんを発見したという。ケガなどないというが、だいぶ衰弱しているため、歩いて降りられるかは分からないという。宇都宮隊員は「すぐ救助隊を向けるから、もう少しここで動かずに待っていて下さい」と言い置き、食料などを置いて降りてきたものであった。

雨降谷出合いに着いたところ消防の部隊が大勢おり、入山の準備をしていた。渡辺、市川の両隊員は

消防の先発隊と一緒に、すでに入渓しており出合いにはいなかった。

午後5時40分、高田副隊長以下4名で暗くなる前に入渓した。先発した渡辺隊員の無線では、まだ遭難者とは接触できず難行しているようであった。

前川隊員が体の不調を訴えた。これからまだ先は長い。ヘッドランプでの沢登りは危険も伴う。おそらく現場に到着しても遭難者の様態が緊急を要するものでなければ、現場でビバークして翌日の搬送となるだろう。高田副隊長にお願いし、前川隊員と一緒に下山してもらうことにした。そして消防署長と検討し、今日は現場でビバークするので、消防隊員も今日の入山はやめ、明日夜明けとともに入山するよう進言してもらうことにした。

私は橋本小隊長と先を急いだ。幾つも現われる大小の滝を、直登したり高巻いたりしながらヘッドランプの灯りで進む。午後7時42分、先発の渡辺隊員からの無線で「遭難者と接触した。Nさんは比較的元気なので、今日は現場でビバークする。夜明けとともに救助作業にかかる」旨の連絡があった。賢明な判断である。

私たちは大滝の下に到着した。下の岩場で市川隊員と消防の2名の隊員が焚き火をしビバーク態勢に入っていた。上の現場には渡辺隊員と消防の小林中隊長が登っているという。私と橋本小隊長も大滝の下流から高巻くことにした。急なガレ場である。立木を掴みながら強引に登っていく。70メートルほど登ると急斜面に鹿の踏み跡らしきものが横に続いている。慎重にそれをトラバースする。前方に遭難現場にいる渡辺隊員らの灯りが小さく見えてきた。

午後8時40分、私たちも大滝落ち口に下り立ち現場に到着した。Nさんは外傷などはなく比較的元気で私との会話にも応じた。立ち上がるがフラフラして何とも心許ない。今日はビバークとなるので薪を大量に集めることにした。明日の夜明けまで焚き火を絶やさないようにしなければならない。焚き火はサバイバルの基本である。沢の中なので延焼の危険性もない。

火が燃えだした。救助隊は朝から山の中を動きっぱなしで、着ているものは汗でぐっしょりだ。昼は暑いが9月半ばともなれば夜中は冷え込むだろう。上半身裸になって、着ているものを燃え盛る焚き火にかざして乾かす。Nさんは3日目のビバークだ。それでも今日は焚き火がある。Nさんには持参した防寒衣等を着せ、火の側で横にならせた。

焚き火を囲み、うとうとしながら8時間も火を燃やし続け、午前5時になって夜が白んできた。今いる場所は両側が岩場のゴルジュで切り立ち、大滝が

らさらに2つほど上の滝上らしい。Nさんを立たせてみるが、自力で立っていることはできない。ヘリで収容する他ないようだ。ここからヘリにピックアップは不可能だ。私と消防の小林中隊長はヘリにピックアップできる場所を探しに出かけた。谷が深いから左岸の尾根まで搬送するしかないようだ。谷を100メートルほど上流に行くと、左岸がいくらか傾斜が緩む。その斜面をジグザグに100メートルほど登ると左岸の枝尾根に出る。その尾根を少し登ると立木の低い場所があり、ここからならホイストも可能なようだ。ここをホイストポイントに決定する。小林中隊長はNさんを搬送するため下っていったが、私は吊り上げ場所の整備にかかる。

下から応援部隊も大勢登ってきた。消防庁の航空隊のヘリもスタンバイしているようだ。下から登ってきた青梅消防署の救助隊にも手伝ってもらいホイストポイント整備も終わった。Nさんの搬送が手間取っているらしい。迎えに行く。Nさんを両脇から隊員が支え、上からザイルで引き上げている。Nさんはほとんど両隊員にぶら下がっている状態だ。私も交代して肩を貸し、何とかホイストポイントまで引き上げた。

ヘリの音が聞えてきた。発煙筒を焚いて場所を指示する。ヘリが進入してきて頭上でホバリングする。航空隊員がホイストで下降して来て担架にNさんを乗せる。下で補助ロープを操作しNさんの担架は航空隊員とともにホイストでピックアップされヘリの中に収容された。ヘリはゆっくり旋回し尾根の向こうに消えた。

4日間に渡った少し過酷な救助活動であった。それでもこれが遺体収容などではなく、ハッピーエンドで終わったからまだ救いだ。

パーティの分裂が思わぬ事故につながる、という例を地でいった遭難であった。はぐれてしまってからあわてても遅いのだ。

Nさんはヘリで立川の国立災害医療センターに搬送されたが、足首の骨折などが見つかり、それから1ヶ月以上も入院することとなる。

ほたるぶくろ遭難者とみて夜を明かす



(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(21)

鶴の湯温泉は、江戸時代の延宝年間(1673~1680)の古絵図には、湯ノ権現(熊野権現、熊野三社権現、明治初年に温泉神社)が描かれていますので、温泉の利用は古くからあったことがうかがえます。また、原村の村鑑帳には、社の「御手洗・みたらし」として位置付けられています。

江戸時代後期の「武州多摩郡小河内原温泉画図」には、クマノゴンゲン社に向かって左にシカノコ、右にツルノコがあり、往来をはさんで建つ2軒の大きな旅籠には、草鞋を脱いでくつろぐ人や行き来する人たちが見え、また、湯壺から溢れる湯が街道と湯宿「湯本」の下を埋樋で通って滝となり、ここにも滝に打たれている人たちがいます。さらに、その下には大滝があり、ムシノコの壺があり、末流は多摩川へ注いでいます。まるで、江戸時代とは思えない温泉場の喧騒が伝わってく

るようです。

湯場には、小河内ダム工事で移転する前、8軒ほど旅館があり、それぞれの旅館が湯壺から温泉を汲んで、リヤカーで運んでいました。鶴の湯の効能は、切りきずや慢性皮膚病、糖尿病などによく、単純硫黄温泉のもつ効能が知られています。

「むかしのこと、鶴の湯のどこの旅籠も、湯治客が手摺にかけておいた手拭いが、全部なくなってしまうという不思議なことがありました。宿の者が、それとなく見張っていても、風が吹き飛ばすわけでもなく、いつの間にか無くなっているのです。ある月夜の晩のことでした。室沢の不動滝の所で、賑やかな声がしています。滝上の爺さんが滝をのぞいて見ると、なんと手拭いで頬かむりをした数十匹のネコが賑やかに踊り狂っているのです。」

【資料】広報おくたま、武州小河内原温泉画図

(岡部義重)

奥多摩歳時記

新緑の季節

アオゲラ、アオキなど、動植物の名前でアオと言いつつも実際の色は緑色であるなど、日本人の色彩に関する言葉遣いには、少しファジーな点が見られるようです。

新緑という言葉は、この類ではないのかも知れませんが、さらにこの時期の森の微妙な色合いの表現として萌黄色という言葉もあります。しかし、植物の芽吹きの色は、このようなひとつの言葉だけで言い表すことは不可能です。

前年の秋に、すっかり葉を落とした森は、冬の間、細く尖った冬芽を枝先につけているためなのでしょう、寒冷な大気とあいまって、厳しい雰囲気を見る人に感じさせます。

その山が、冬芽が膨らみ、丸みを帯びるだけで、雰囲気が変わってきます。どことなしに柔らかな感じを醸し出すのです。この早春の森の様子が、季語で言う「山笑う」状態なのでしょう。そして、冬芽が開き、いろいろな色の新芽が顔を出します。その色には、緑色の仲間だけに留まらず黄色や赤色もあります。

また、新緑の時期の楽しみは、多彩な新芽の色合いだけではなく、いろいろな段階の芽吹きの様子を観察すると、「こんな形で冬芽に納まっていたのか!」と感心するほど、精緻かつ合理

的な納まり方をしていたことに気付かされます。

植物の芽生えは、同じ地域では標高の低い場所から、徐々に高いところに及んでいきます。でも、植物の芽吹きは、標高差だけに左右されている訳ではありません。

スプリング・エフェメラル(春のはかない命)と呼ばれるカタクリやイチゲの仲間などは、それらの植物の上を覆う木々よりも先に芽生えます。このように、陽光を十分に受けるために季節を先取りするという植物の戦略も、芽吹きは時期に影響を与えています。

このような植物の種類による差だけでなく、同じ樹種、同じ固体でも芽生えに時間差を生じさせる場合があります。根元から「ひこ生え」と呼ばれる不定芽を出すイヌブナやカツラでは、本体の芽生えに先立ち、ひこ生えがまず芽吹きを開始します。

植物が、平面的だけでなく、立体(空間)的な住み分けができる理由のひとつに、この「芽吹きは時期をずらす」という戦略の存在があるのでしょう。

この春、奥多摩を訪れられ、新緑の微妙な色合いの素晴らしさを味わられるとともに、植物たちの戦略に興味を持ってくだされば幸いです。

(堀越弘司)

ガイドだより ～越沢～

昨年12月中旬、まず越沢のトチノキを目指しました。落ち葉の積もった悪路の歩きにくいこと。凍っていなかったのは幸いでした。それでも慎重に登って行き、巨樹の下につきました。

イベント「越沢溪谷と巨樹」の目的地です。

今まで訪れたのは葉が茂っている時期ばかりで、葉のない全体像を見るのは初めてです。なんと大きい！堂々とし、圧倒される姿で迫ってきます。

首が痛くなるほど梢を見上げ、枝越しに遠く見える空を眺めた後、巨樹を後にしてその日の主目的地に向かいました。

バットレスで珍しく岩登りの人を見かけました。私たちはもう少し下流まで行き、階段を登って行きました。

階段を上り詰めると鎖場です。気持ちを引き締めて手袋を脱ぎ、鎖を握ります。凍りつくこともかじかむこともなく大丈夫でした。途中で荷物をおろして展望台へ。こんなところに展望台を作る遊び心のある人ってどんな人でしょう。三点確保で進み展望台にたどりつきました。折角の展望台なのにどんな景色を眺めたのか、すごいな！以外はっきり思い出せないのがとても残念です。

ルートに戻ってきていよいよ鎖場のメインにとりつきます。「えー こんな所に行くの！」と心の中で叫び、足を踏み出しました。しっかり鎖を握って前ばかり見て進んだのでしょうか、どれだけ切り立った崖だったのか全く思い出せません。ここで片方の手でも放れたらこの道幅ではとてもバランスをとって立ってられないから下まで落ちるなー、救助隊が来て大騒ぎだな、なんてことが頭に浮かんだのを覚えています。やっぱり、経験者と一緒で良かった。

鎖をたどりながら進む崖に、乾いたような薄い色の葉をつけたヒカゲツツジが次々に現れるのを見て、花を見たいな、花の時期にまた来る？などと考えていたようです。途中で素敵な滝がありました。

緊張に緊張を重ねて漸く金比羅神社にたどりつきました。トチノキから1時間、長い時間だったように思いましたが、集中時間は40分程度だったということです。

小休止の後、大塚山を目指して急な登りにかかりました。広沢山までの1時間の長かったこと。山頂があんなに遠いところにあったとは予想外でした。その後大塚山を巻き、御岳を素通りして日の出山に。

登って下って沢井駅へ、長いながい山道でした。

(西川晴美)

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、春から初夏に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

23年度のイベントカレンダーが出来ておりますので、ご入用の方は、返信用封書に80円切手を貼り、観光協会にお申込みください。

- ① 5月16日(月) 奥多摩三山シリーズ
大岳山に登ろう
応募締切日 4月30日(登山健脚)
- ② 5月19日(木) 新緑の奥多摩湖右岸15kmを歩く(いこいの路)
応募締切日 4月30日(ハイキング)
- ③ 5月25日(水) 笹ノ岩山からソバツブ山(シロヤシオ)
応募締切日 5月10日(登山健脚)
- ④ 6月1日(水) じっくり・ゆっくり植物観察(場所はお楽しみに)
応募締切日 5月15日(ハイキング)
- ⑤ 6月3日(金) 峰谷から鷹ノ巣山登山
応募締切日 5月15日(登山健脚)
- ⑥ 6月8日(水) *奥多摩三山シリーズ
ヌカザス尾根から三頭山
応募締切日 5月25日(登山)
- ⑦ 6月10日(金) 妙琴ゼミを訪ねる倉戸山
応募締切日 5月25日(登山)
- ⑧ 6月15日(水) *七ツ石山から千本ツツジ
応募締切日 6月1日(登山)

募集人員：各回30名

参加費：700円、ただし*印は別料金

次号は、平成23年7月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会